

このほか、内蔵逆位などの特殊症例にも有効活用することができた。今後も症例を蓄積していきたい。

4 当科における TEM 施行症例の検討

谷 達夫・岡本 春彦*・小林 康雄
 亀山 仁史・野上 仁・丸山 聡
 飯合 恒夫・島山 勝義
 新潟大学消化器・一般外科学分野
 県立吉田病院外科*

【目的】TEMの有用性と問題点を明らかにする。

【対象】1994年12月から2006年3月までに、大腸腺腫と大腸癌に対し当科でTEMを施行した40例。平均年齢68歳。

【結果】病変の占拠部位はRsSが1、Raが7、RaRbが4、RbRaが2、Rbが24、RbPが2例。平均手術時間は病変が50mm未満24例は90分、50mm以上16例では138分であり有意差を認めた。病理学的所見の内訳は腺腫6、m癌27、sm癌3、mp癌3、ss癌1例。平均腫瘍径は腺腫57.7、m癌50.1、sm癌55.0、進行癌51.5mm。

【考察】EMRでは分割切除となるような30mm以上の直腸腫瘍に対し、一括切除と縫合閉鎖が行えるTEMは、正確な病理学的診断と早期の創閉鎖が望め、根治性も十分で術後のQOLも満足いくものであるが、腫瘍径50mm以上の症例では手術時間も長くなり手技も困難となる。sm以深癌に対するTEMの適応はリンパ節転移の問題を含め慎重に考慮すべきである。

5 MRIで分析した坐骨直腸窩痔瘻の進展のルールについて

加川隆三郎

洛和会音羽病院大腸肛門科

6 大腸疾患における Virtual endoscopy に関する有用性の検討

渡辺 庄治・嘉戸 慎一・宮島 透
 麻植ホルム正之*

厚生連豊栄病院内科
 新潟労災病院内科*

Virtual endoscopyは、CTやMRI、超音波で得られたデータをworkstationで再構成し、光学内視鏡に類似した三次元画像を表示する方法である。近年、multidetector-row CT (MDCT)の開発と画像処理用のコンピュータの発達により詳細な画像が得られるようになった。Virtual endoscopyは、被検者に与える苦痛が少なく、光学内視鏡が到達できない部位での三次元画像が得られることより、今後の活用に期待がもたれる。今回われわれは、大腸癌に対し、Virtual endoscopyを試みたのでその有用性に関し検討した。

〔症例1〕56歳、男性。検診で便潜血陽性を指摘され下部消化管内視鏡検査を施行。横行結腸癌を認めた。

〔症例2〕68歳、女性。脳梗塞後遺症にて近医通院中。2週間前より倦怠感出現。増悪のため救急車にて当院救急外来受診、入院。Hb: 7.9と貧血を認めた。原因精査目的に下部消化管内視鏡検査施行。盲腸癌を認めた。大腸癌の症例に対しVirtual endoscopyを試みた。Virtual endoscopyのenema modeは注腸造影検査と同様の所見が得られると考えられ、今後有用となる可能性が示唆された。